

目的 体型と衣服設計との関連を明らかにするには、人体の形態的特性を把握し、設計の基準を得ることが必要である。形態的特性を部分体型として把握し、作図に関連づけるための知見を得たので報告する。

方法 体型を部分的に把握するには、モアレ法によることが適切と考え、1979年に予備実験を試みたので、今回は被検者に21~22才の青年女子50名を選び、1980年5~6月に上半身を撮影したものを資料とした。

前面では乳房と肩部に向かった胸部傾斜、後面では肩甲骨後突点周辺のふくらみを部分体型の特性として検討した。それには乳頭点を中心に45度ごとの切断線を写真上に描き、肩甲骨後突点周辺はモアレ縞の中心を基準に乳房と同様の切断図を描いて解析し検討した。

結果 1) 各切断線を図化し重合したところ形状的に大差ないことがわかった。さらに乳房は半球状に、後突点周辺は皿状に近似であり円弧とみなして検討してよいと判断した。  
2) 縦断線を円弧とみなし中心角を求めたところ、乳房部における平均値は58.3度、標準偏差12.7度でばらつきが大きいことがわかった。また乳頭をとりまくモアレ縞が2本の時は中心角30~40度、3~4本では40~60度、5~7本では60~80度となる傾向がみられた。  
3) 胸部の傾斜角度の平均値は30.1度、標準偏差は5.9度であった。また縞数と傾斜角度の間には0.83の相関がある。この傾斜角度と乳房中心角の間には相関性はみられない。  
4) 後面における肩甲骨中心角の平均値は20.7度であった。被検者のうち中心角が15度~30度未満のものが、全体の約80%を占めた。